岐阜市立女子短期大学研究紀要第 63 輯（平成 26 年 3 月）

# レトリック批評におけるメトニミーの可能性

## ―ミシェル・ド・セルトーとポール・ド・マンを読む―

A Consideration of the Possibility of Metonymy in Rhetorical Criticism:
Reading the Texts of Michel de Certeau and Paul de Man

中西 満貴典
NAKANISHI Mikinori

Abstract

Rhetoricians have long thought highly of metaphor as a trope, while paying less attention to metonymy. This study deals with the possible function of metonymy especially in thinking patterns. We discuss this notion referring to the relation between ‘strategy and tactics’ corresponding to the concept of ‘place and space’ presented by Michel de Certeau. This theorist regards rhetoric as one of the most important ‘tactics’, particularly focusing on metaphor as rhetoric. In order to pursue the ‘deconstructive’ role of metonymy in a socially-constructed ‘place’, we critically discuss Certeau’s insight into the dynamic aspect of rhetoric in the field of ‘space’.

Keywords : レトリック、メタファー、メトニミー、思考様式、書くこと／読むこと

### 問題の所在と方法

小論は、互いに関連しあう二つの論点によって構成される。それらを一貫して結びつけているものは、思考の様式とレトリックにたいする関心である。われわれがここで論じるのは、文彩論としてというよりも、むしろ、ひろく人間の思考様式一般にかかわるものである。なかでも、メトニミー（換喩）の機能について特別な注意をはらう。メトニミーは、メタファー（隠喩）の陰にかくれてあまり目立たないが、われわれの思考の枠組みを反省的にとらえなおさせる潜在力をもっていると、みたてる。方法としては、ミシェル・ド・セルトーの、＜場所＞と＜空間＞にかんする所論の検討からはじめる。われわれが日常的におこなう実践が、あらかじめ、ある特定の意図でもって構築されている社会構造のなかで、どのように規定され、また反対に日常的実践が、いかなる方策でもって大きな枠組みに抗っていく可能性をもちうるか、を追うものであり、その構図におけるレトリックのはたらきを考察する。後半においては、セルトーの＜場所／空間＞図式をうけて、メタファーとの対比において、メトニミーの機能の潜在的側面を掘り起こす作業をおこなう。これまで、メトニミーにかんする研究は、メタファーにたいする関心の背後に追いやられてしまっていて、それが修辞学においてであろうと、文学批評においてであろうと、メタファーのメトニミーへの優位は変わらないようにみえる。メタファーとメトニミーが、転義的比喩の二つの代表格として並べられているならば、メトニミーへの注目度の低さはなにゆえによるものであろうか。一般に、メトニミーは隣接関係によって、メタファーは類比関係によって語を置換するとされてきている。一見すると、意味の変容の度合いは、もともとまったく異なる次元に属する、二つのもの（あるいは二つの概念）が結びついてしまうメメタファーのほうが、その印象の落差が大きく注目を集めやすい傾向にあることは確かにいえる。また、「換喩を隠喩と同じように意味の転換という操作レベルにおいて分析したことが、この転義の能力を少なめに見積もり、隠喩の影に追いやった一つの原因であった [1]」という指摘もみとめられる。

本稿における試論は、メタファーよりもむしろ、メトニミーの可能性について探究してゆく方向性をもつ。セルトーの、＜場所／空間＞概念、つまり、生産システム、支配的文化のエコノミーが作動する固有の場としての「場（＝＜場所＞）」において、個々の人間がそのような環境のなかで機をとらえ、うまく自分なりのやり方で、強いられた枠組みをブリコラージュする実践の場としての＜空間＞、という二つの次元の存在を設定することを前提としている。後者の＜空間＞において、レトリック、とりわけメトニミーのはたらきの可能性について考察することを本研究のねらいとする。

### セルトーの＜場所／空間＞概念

セルトーの洞察にしたがえば、＜場所／空間＞の図式が、＜戦略／戦術＞の分節と照応関係にあることが示され、「戦術」の恰好の例として「レトリック」が位置づけられている [2]。このような推論の流れをつかむために、セルトーの図式を以下素描

する。まず初めに、場所と空間についてであるが、ここで言及される＜場所＞とは、端的にいえば、「すべてのポジションが一挙にあたえられるような布置のことである。そこには安定性がしめされている[3]」という性格をおびている。＜場所＞を構成する要素は、ひとつひとつがはっきりと区分されて「適正に」配置されている。そのような要素を対象化することを保証する、明確に設定された、いわば座標軸のようなものが＜場所＞である。「すべてのポジションが一挙にあたえられる」とは、すべての要素・位置・部品が、あらかじめ設計・計画されている、ということを示唆する。「布置」とは、すべての要素を把握したり対象化したりすることを可能にする、精緻に構成されたシステムのことであり、すべての位置を特定することができる、正確で網羅的な地図のようなものである。このような環境特性をもつ＜場所＞には「安定性がしめされている」のである。一方、＜場所＞の対概念として提示された、＜空間＞概念は、そのような安定的で固定的な＜場所＞概念に、「方向というベクトル、速度のいかん、時間という変数をとりいれてみれば、空間ということになる[4]」（傍点は原文どおり）のである。セルトーは、＜空間＞をつぎのように特徴づけている。

> 要するに、空間とは実践された場所のことである。たとえば都市計画によって幾何学的にできあがった都市は、そこを歩く者たちによって空間に転換させられてしまう。おなじように、読むという行為も、記号のシステムがつくりだした場所―書かれたもの―を実践化することによって空間をうみだすのである[5]。（傍点は原文どおり）

この引用のなかには、われわれが目指す研究のための洞察・ヒントがたくわえられている。小論は、この知の資源をもとに論考をすすめるにあたり、セルトーの二つの観点を援用する。ひとつは、＜空間＞概念は、端的にいえば、「実践化された場所」であり、＜場所＞が固定的・権威的・非時間的であるならば、＜空間＞は流動的・創造的・非-場所性をおびたものである、という視点である。もうひとつは、「読むという行為」（つまり読みの実践）が、記号のシステムとしての＜場所＞を、流動的・創造的な＜空間＞に変容させる契機、になりうることの指摘である。これら二つの着目点を結びつける概念装置として、セルトーが提出している＜戦略／戦術＞図式は、まさに＜場所／空間＞図式との相同性が示される。

> わたしが「戦略」とよぶのは、意志と権力の主体（所有者、企業、都市、学術制度など）が周囲の「環境」から身をひきはなし、独立を保ってはじめて可能になるような力関係の計算のことである。こうした戦略は、おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所を前提としており、それゆえ、はっきり敵とわかっているもの（競争相手、敵方、客、研究の「目標」ないし「対象」）にたいするさまざまな関係を管理できるような場所を前提にしている。政治的、経済的、科学的な合理性というのは、このような戦略モデルのうえに成りたっている[6]。（傍点は原文どおり）

このような＜戦略＞概念は、＜場所＞概念と密接に連動している。＜場所＞において、＜戦略＞のプログラムが実際に機能するために、ある特定の性質をおびた＜場所＞の存在を前提にしている。それは、「おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所」であり、本稿であつかう＜場所＞概念である。そのような＜場所＞はまた、「はっきり敵とわかっているもの …にたいするさまざまな関係を管理できるような場所」でもある。このような「管理」を可能にしている知こそが、「合理性」（政治的・経済的・科学的な分野それぞれにおいて発動する合理性）であるとされる。このような知は、単純な好奇心から生まれたものではなく、ミシェル・フーコーが説くところの知／権力論の文脈のなかでとらえられるべき知である[7]。合理性や知は、＜戦略＞を立てる源泉であり、それによって生み出される合理性の言説の網の目が、ここでいう＜場所＞概念そのものである、といえる。セルトーは、フーコーの、権力作用とつねに連関する言説（ディスクール）概念に依拠しつつ、われわれの言説実践が究極のところ、知／権力論に回収されてしまう構図の超克をこころみる[8]。われわれの日常的実践（セルトーは例として、話すこと、読むこと、歩くこと、料理することなどをあげている）が、たんに支配的政治・経済体制や支配的文化の形式や適正な言語体系のなかで規定され、受動的におこなわれ、社会全体の仕組みを再生産することに寄与してしまう、という理解をのりこえようとする。むしろその反対に、そのような日常的実践が、強大な生産システムのなかで「もうひとつの生産」行為をしたたかにおこなっているのであり、その様態にたいして真正面からむきあおうとする。そして、この実践を、強者の＜戦略＞にたいする、弱者の＜戦術＞と位置づけ、その典型的な例として「レトリック」をあげている。

**戦術としてのレトリック（「読むという行為」）**

セルトーは、支配的な言語体系、つまり言語（ラング）における発話行為（パロール）、あるいは権威としての作品を読むという「行為」をレトリックとしてみなす。

> 戦術のいろいろなタイプをあげてみるなら、レトリックがかっこうのモデルを提供してくれる。こう言ったからといって何の不思議もないのであって、ひとつには、このレトリックというものが、言語（ラング）がそのはたらく場でありその対

象でもあるような、「技芸（トゥール）」をあらわしているからであり、他方でまた、そのようにことばをあやつる業は、相手（受け手）の意志をかえようとする（誘惑する、説得する、利用する）際の機会とやりかたにかかわっているからである。こうした二つの理由から、レトリックあるいは「話しかた」の技芸（シアンス）は、日常的なもののやりかたの分析にとって、典型的な形態をそなえた装置を提供してくれる。原則として科学的ディスクールがこうしてレトリックをしめだしているのと対照的である[9]。

このセルトーの言述において、レトリックというものが、いかに＜戦術＞としての典型例としてとらえることができるかを示している。＜場所[戦略]＞は、「言語を動かす表むきの規則」（ラング）であり、知／権力のモメントを内包する言説（科学的ディスクール）そのものである、といえる。他方、レトリックが＜空間[戦術]＞の恰好の例である所以は、言語（ラング）がはりめぐらす規則のなかで、その規則にたんに従順にしたがうのではなく、その規則をずらしたり逸脱したり、さまざまなはたらきを見出すからである。規範や固定観念やある特定の価値観をおびた＜場所＞を、自由で流動的で創造的な＜空間＞に変容する力を秘めているものこそが、ここでいうレトリックである。レトリックが、＜場所＞を＜空間＞に変える契機そのものであるならば、レトリック＝＜空間＞という等式は妥当ではなくなるであろう。また、同時に、＜場所／空間＞という表記はいかにもその両項が均等に並べられているような印象を与えてしまいかねない。むしろ、場所から空間へのうごきを表わす＜場所→空間＞の表示のほうが図式の本質を示している、といえるだろう。このような動態としての＜空間＞、およびそこではたらくレトリックの様態について、セルトーは、読むということに注目する。「生産―消費という二項式のかわりに、その一般的等価として、書くこと―読むことを代置することもできるだろう[10]」、と説く。＜場所＞における「生産」と、＜空間＞における「消費」の図式のなかで、その一見、受け身的な「消費」の行為がもうひとつの生産をしているのだ、というセルトーの洞察に立てば、「読むこと」はたんに「書かれたもの」を受動的に消費するのではなく、むしろ、「読むこと」じたいが創造行為の契機になっていることになる。セルトーは、バルトに倣って、読むこととテクスト生産との相同性を指摘する。「読者は、他者のテクストのなかに、快楽の策略、乗っ取りの策略をそっとはりめぐらすのだ。そこでかれは密漁をはたらき、もろともそこに身を移し、身体を発するノイズのように、複数の自分になる。＜中略＞ 読みうるものは、記憶しうるものに変わる。こうしてバルトはスタンダールのテクストのなかでプルーストを読むのだ。おなじようにテレビを見る者も、時事問題の報道のなかに自分の幼年時代の一コマを読んでしまう[11]」。読むということは、他者のテクストをもとに自分なりに新たなテクストを生み出すいとなみである、といえるのである。こうなると、もはや、書くこと―読むこと、をへだてている境界じたいが無効になる。読むことは、すなわち書くことである。スタンダールという作家の固有の作品（作品としてのテクスト）のなかでプルーストのテクストを読むように、ある特定の書かれたテクストのなかに、それを読む者だけの、もうひとつの別の、ある意味でひそかに特権的で創造的なテクストを見出すのである。

**＜場所／空間＞図式におけるメタファー**

以上の文脈において、セルトーのいうレトリック概念において、メタファーはどのように位置づけられているのだろうか。ここでもやはり、メトニミーではなく、メタファーが注目されている[12]。「空間の物語」の章[13]においてメタファー概念を「物語」概念と結びつけている（この操作じたいがメタファー的転義によるものであるが）。

今日のアテネで、公共交通機関はメタフォライとよばれている。仕事に出かけたり、帰宅したりするのに、人びとは「メタファー」を―バスか電車を―つかうのだ。物語もまたこの美しい名でよばれてもおかしくないだろう。毎日、これらの物語はさまざまな場所を横切り、場所を組織化しているのだから。それらの物語は、いろいろな場所を選り分けては、また一緒にして結びつけている。場所をつかってさまざまな文を組み立て、[道]筋をつくりあげるのだ。物語は空間の遍歴（パルクール）である[14]。

引用部の趣旨を端的にいってしまえば、「どんな物語も旅の物語―つまり空間の実践である[15]」、ということになる。空間の実践とは、静的なシステムとしての空間ではなく、空間を生み出していくような実践（もののやりかた、操作）であり、動的次元に属する概念である。メタファーを、電車やバスなどの、都市を線状に横断する媒体としての公共交通機関にたとえられている。また、メタファーは、言語システムのなかでの語りの実践、すなわち、物語も同じように、体系としての言語（ラング）という場のなかを移動し、＜空間＞をつくりだす実践としてとらえられる。都市という＜場所＞を移動する、電車やバスを、メタファーとして見たてる視点そのものも、メタファー的な転義と、いうこともできる。ある意味で、メタファーのメタファー的解釈である。また、定まった言語体系の言語の規則による規制をうけながら（反対に、規則をうまく使いながら）、語りの実践をおこなうこと、すなわち、物語ることをメタファーとして見たてる（物語＝メタファー）のも、メタファー的とらえかたである、といえる。そうであるならば、電車＝物語、

というメタファー的等式が成りたつ。電車に乗って、われわれは、ある駅から別の駅までを移動し、ちがった景色を目のあたりにする。同様に、物語ることによって、現実、非現実を問わず、われわれの身の回りで起こったこと（あるいは起こるかもしれないこと）、存在するもの（あるいは存在しないかもしれないもの）について、物語ることによって、われわれの表象空間を構成していき、われわれは、現実・非現実のなかを移動する（思考したり、想像[創造]したりすることによって、ある表象から別の表象へと移る）のである。

**ド・マンのメタファー／メトニミー考**

これまでの考察によってわれわれは、メタファーのもつ力、すなわち、セルトーの図式でいえば、＜場所＞を＜空間＞に変容させる力を十分に認識するにいたった。さて、メタファーのこのような動作範囲のひろがりのなかで、転義的比喩のもうひとつの代表格である、メトニミーが入りこむ余地はないのであろうか。二つのまったく異なる位相を、そのわずかながらの類似点を見出すことにより、その二者を同一のものとして結びつけるメタファーにたいして、隣接性をたよりに二つのものを結びつけるメトニミーは、既述のとおり、地味なあつかいをうけてきた。メタファーのメトニミーにたいする優位性が、文学批評のなかにおいてみられる例をあげる。ポール・ド・マンは「記号論とレトリック」のなかで、マルセル・プルーストの一節を引きながら、メトニミーの位置づけのされかたに注目する。

> 私はすでに本を手にして私の部屋でベッドに寝ころんでいたが、その部屋は、透き通ってはかなく消えそうな内部の涼しさを、ほとんどとじた鎧戸のそとの午後の太陽から、ふるえながらまもっていた。＜中略＞　この蝉の音楽は、人間がうたう音楽の一節―好季節に偶然きいたのだが、つぎにきくときにその好季節を思いださせる―のように光の感覚を呼びおこすのではなくて、もっと必然的な一つの絆で夏にむすびついていて、快晴の日々から生まれ、そうした日々とともにしかふたたび生まれることはなく、そうした日々の本質の少量をふくんでいるのであって、われわれの記憶に単に夏の映像を呼びさますだけでなく、夏が帰ってきたことを、夏が実際に目のまえにあって、あたりをとりまき、直接に近づきうることを確認するものなのである[16]。＜後略＞（傍点は中西による）
> （「スワン家のほうへ」井上究一郎訳）

ド・マンはプルーストの一節を取りあげて、メタファーが、メトニミーにたいして優位なふるまいをしている様態を指摘する。蠅のブンブン鳴る音と、夏という季節との連結のされかたについての説明がつづく。

> ＜中略＞　夏の自然な経験を喚起させる二つの方法を対照させ、一方の他方への優位性を明確にのべている。蠅のブンブンという音と夏を結びつける「必然的な一つの絆」は、夏のあいだに「偶然に」きかれるメロディより、はるかに効果的なシンボルとなっている。そのような優位性は、隠喩（メタファー）と換喩（メトニミー）の差異に符合する区別をもちいることに表現されている。必然性と偶然性は類似（アナロジー）と近接（コンティギュイティ）を区別する正当な方法であるから。
>
> メタファーを構成している、同一性と全体性の推論が、純粋に関係的な換喩的（メトニミック）接触には欠けている。たとえば、アキレスをライオンと解することには真理の一面がふくまれているが、フォード氏を自動車と解することにはそれはまったくない。この一節は、メタファーのメトニミーへの美学的優位性について書かれたものだが、この美学的主張は、美学そのものを一つのカテゴリーとして在ることを許すような、形而上学的体系の存在論的基盤である諸カテゴリーを用いてなされている。夏のためのメタファー（この場合、蠅たちの「室内音楽」によって喚起させる共感覚）は、偶然的であるどころか、本質的で永劫回帰的であり、言語的な表象や比喩によって媒介されないような現前性（プレゼンス）を保証している。最後に、この一節の第二の部分において、現前性（プレゼンス）のメタファーが認識の基盤としてあらわれ、こうして諸矛盾のなかで最も分裂的なものの和解を約束する。そのときまでには、メタファーの力への支持は、それを疑問に付すことが神聖を汚すようにみえるほどになっている[17]。
> （傍点は原文どおり）

二つの異なる事象のあいだに、何らかの類似点を見出すことじたいのなかに、すなわちメタファーのなかに、ド・マンがいいあてているような、その類似性の必然性、本質性、また、ものの真理の一面性が存在する、という見かたが一般的になされるのである。そうなるとメタファーは、われわれの認識の基盤をなすものとなり、現前性を担保し、神聖性さえおびてくる。その文脈においては、メタファー的結びつきは、それに異議をはさむことが異端的ふるまいとしてみなされてしまう絶対性、を呈しているようでもある。ド・マンは、「文法のレトリック化」（修辞疑問文を例にあげて）にたいする「レトリックの文法化」（プルーストの一節を例にあげて）の所論を展開し、そのなかで、われわれ人間の読みの行為や認識一般の解釈において、非人間的で機械的な文法的パターンに依拠する傾向を批判する[18]。

プルーストの一節の、「蠅の音」へのド・マンの言及にもどる。蠅のブンブンという音と、夏とをメタファーとして結びつける類似点とは何であろうか。蠅は、暑い季節である夏に活発に飛

びまわり、ブンブンという音を出すものである、という蝿の「属性」に注目したのであろう。ほかの季節に蝿が生息しえたとしても、室内楽のごとく奏でる音を発するのは春でも秋でも冬でもけっしてないのである。夏にしかそのような音は聞こえない、という必然性が強調されるのである（夏だけ独占的に、その音は聞かれるのかについては、ほんとうのところは不明であろう）。同様の類として、「アキレスとライオン」があげられている。ギリシア神話の英雄アキレウス（＝アキレス[ローマ名]）とライオンというまったく異なったものどうしのあいだには、アキレスの勇猛さと、ライオンが「勇気があって気高い」ことに類比性がある、という見かたに依拠している。このメタファーが成立するのは、ライオンの属性が、そのような勇猛な生き物であるという前提があってのことである。しかし、この属性が自明視され、アキレスとライオンの結びつきは必然性があるようにみえている。この二つのものの差異を消し去るいとなみがメタファーであり、メタファー的結びつきは神聖視さえされるのである。このような類比化じたいが、必然的で本質的で、真理の一面を呈し、ド・マンにならえば、形而上学的体系の存在論的基盤にささえられたものとしてとらえられているのである。聖なるアナロジーに異をとなえることは、神聖を汚す行為としてみなされてしまう絶対性を、メタファー的思考様式がもってしまうのである。

他方、蝿のブンブンという音と夏を、メトニミー的にとらえるならば、どのような結びつきをみることができるのか。ド・マンもみとめているように、蝿の音は、たまたま（偶然に）夏に聞かれただけで、両者の隣接的関係はそれ以上でもそれ以下でもない素っ気ないものである。このような弱い連関は、必然性も本質性もみとめられないものになってしまうものとして、このような結びつき（メトニミー）にもとづく思考様式は軽んぜられる傾向にあるのではないだろうか。（メタファー的思考様式を前提とする「合理性」からすれば、メトニミー的連関が思考の一様式であるとさえみとめられていないかもしれない。）ド・マンは、アキレスをライオンと解することのなかには、真理の一面があるとしているのにたいして、メトニミーの例としてあげた、フォード氏を自動車と解することには真理性がないという（文脈上、ド・マンの本意はその反対であると思われるが）。20 世紀初頭に米国で、自動車の製造を始めたヘンリー・フォードという人物の名前と、自動車（1908 年に売り出された大衆車Ｔ型フォードが成功し、多くの米国民に知られるものなっていた）との関係は、大衆化された自動車の名前に「フォード」が冠せられていたという類似性である。この類比は、メタファー的類似性とはまったく異なっていて、自動車名に、たまたま「フォード」が付けられていただけのことである。アキレスのなかに、ライオンのような「生得的な」勇猛さ（ほんとうにライオンが勇猛であるかどうかは留保できることではあるが）を見出すことはできるが、フォードのなかに、自動車の属性なるものを見出すことはできない。このように、メトニミー的接触は、たまたま隣り合わせであった（あるいは、たまたま関連性があった）、という偶然性が支配していることになる。メタファーのメトニミーにたいする優位性というのは、たんなる修辞における（文彩における）美学的な優位性にとどまらない。それは、必然性の、偶然性にたいする優位という考え方（思想）にもとづくものである。では、メトニミーの「劣位」は、ほんとうにメタファーよりも劣ったものゆえであるのか。換言すれば、異なる二者を、アナロジー的に結びつけるメタファー的思考様式や発想様式のほうが、偶然的に隣接する二者（偶然的な出来事や連想）を結ぶメトニミー的思考様式のよりも、ほんとうに優れているのであろうか。

**＜場所／空間＞図式におけるメトニミーの可能性**

本稿の目的は、メタファーの背後に追いやられているメトニミーの存在、それも思考様式の機能におけるその可能性を探究することであった。そこで、先に論じた、セルトーの＜場所／空間＞図式に、この問題をあてはめての論考をこころみる。セルトーは、＜場所＞において戦略を、＜空間＞においては戦術を、それぞれ位置づけて、戦術の典型的な例としてレトリックをあげた。支配的言説（あるいは科学的ディスクール）や、言語体系（ラング）のなかで、一見したところ、その規制や規則にしたがっているようにみえながらも、それらをずらし、独自のやりかた（独特な表現のしかた）を展開する様態を、「もうひとつの生産」としてみてきた。そして、メタファーは、支配的制度や言説、現実世界を変容させ、異界としての＜空間＞を立ち上げるときの媒体になる、という見たてをしていることを、われわれは確認した。たしかに、メタファーとしての電車やバスに乗ったり、メタファーとしての物語を読んだりすることによって、われわれは、定められた場所間を移動したり、現実世界のなかで想像力をもって生きたりすることができる。図式的にいえば、＜場所→空間＞における、まさに転位の戦術のあらわれとしてメタファーを位置づけることができたのである。しかしながら、メタファーは、もうひとつの方向、つまり、流動的な＜空間＞を、固定的な＜場所＞に変えてしまう力も同時にもち合わせているのではないだろうか。ド・マンの洞察にしたがえば、メタファーは、差異を隠蔽し、同一性を求めるベクトルを有しているということになる。差異を差異としてみとめておくのではなく、差異どうしのなかに類似性を見出し、異なる位相を結びつけるというある種のはなれ業が、人びとを魅了する力をもっているということはうたがいないことである。それは、修辞としての転義的比喩の機能だけにとどまらない。われわれの認識のしかた全般にわたっておよぼす力をもち合わせていることに注視すべきであろう。この文脈のなかでは、差異

のなかの類似性は、偶然発見されたものではなく、その類似は必然的で本質的であるとされる。また、重要な点であるのでくりかえし言及することになるが、メタファー的思考様式は、認識論どころか形而上学的存在論の基盤をささえていて、さらに、その「必然的な」結びつきは神聖化さえされて、汚すことのできない観念にまで仕立てられる。

差異をめぐるこのような方向性、すなわち差異のなかに必然的な類似性を見出す流れは、多義性から一義性へと向かうベクトルに照応する。それは、流動的で創造的な契機にみちた＜空間＞から、固有の場としての＜場所＞への流れと逆行するものになってしまうのではないか。セルトーの＜場所／空間＞概念において、メタファー（レトリックの文脈のなかでメタファーは提出されている）は、日常的実践を特徴づけているものとして、＜空間＞の世界に生きるもの（あるいは、＜場所→空間＞の推進力）として位置づけられていて、それなりの説得性をもっていた。ところが、メタファーにはもうひとつの顔があることをみせられると、思考様式を規制するレベルの議論において、メタファーには二面性があることになる。モデル的にいえば、＜場所⇄空間＞の両方の矢印にメタファーは関与しているのである。意味の次元でいえば、唯一の意味や観念、ある特定の価値観しかみとめない世界（＝＜場所＞概念）から、複数の意味の共存をみとめるためのもののやりかた（時機をとらえる一種の策略）の代表例として、レトリック（文脈上はメタファー）が位置づけられているのとは反対に、複数の差異、複数の意味や矛盾を同居させておかないで、類似性を契機にそれらを統合し、同一性を現前化させる機能を有するものとしてメタファーを措定することもできる。それでは、セルトーの＜場所／空間＞図式において、まったく言及されてこなかったメトニミーは、メタファーとの対比において、＜場所⇄空間＞の議論のなかで、どのような関与のしかたができるのであろうか考えてみたい。

結論から先にいえば、メトニミーは、＜場所→空間＞の方向のみにおいて機能し、けっして＜空間→場所＞のベクトルはもたない。メタファーが、両方の方向性をもつのにたいして、メトニミーは、固有の＜場所＞（現実世界）を、想像（創造）の世界である＜空間＞に変えるモメントのみ有する。バルト風にいえば[19]、メトニミーのもつ力は、＜場所＞としての「作品」を、＜空間＞としての「テクスト」に変換する方向のみにおいてはたらくのである。また、＜場所＞を占める固有の、権威を内包する「作者」（作者のみが作品における唯一の根源的な意図を独占しており、規範的な解釈のみがゆるされる）には、死の宣告が付せられ、代わって「読者」が誕生する流れに沿うものである（この「読者」こそは、＜空間＞のなかで、「もうひとつの生産」（＝読み手による自由な解釈）をになうエージェントである）。

メトニミーが、＜場所→空間＞（作品→テクスト、作者→読者）の方向性のみを有していて、その逆の流れを引き起こさないのはなぜか。この問いを考察するまえに、場所から空間への方向性について、メトニミーにかんしてもメタファーと同様に検証しなければならない。メタファーは、乗り物の比喩でいえば、われわれを駅から駅へ移動させて、目のまえの世界を変えてくれる。また、現実世界のリアリティのなかで、物語（＝メタファー）を読むことによって想像界が形成され、われわれの現実の認識を変えてくれるはたらきをもつ。それは、異なる位相に存在するものを結びつけるメタファーのはたらきによるものであった。それでは、隣接関係に依拠するメトニミーは、この方向性においていかなる関与をしうるのか。メトニミーは、差異にたいしてメタファーの見かたとはまったく異なる様相を示す。メトニミーは、差異や相矛盾するものどうしをメタファーのように結びつけようとするのではなく、むしろ、差異は差異のまま並べ置いておくという姿勢を有する。並置されたものどうしのあいだの連関、フォード氏といえば自動車を連想する関係（創業者の名でもって製品そのものをあらわす比喩）、部分でもって全体をあらわす比喩関係（黒帯という部位でもって柔道の有段者をあらわすたとえなど）を特徴とするメトニミーは、＜場所＞をどのようにして掘り崩すことができるのだろうか。メタファーとは対照的にメトニミーは、異なる隣接する二者間に「本質的で必然的な属性」のようなものを見出すようなことをうながさない。二者のうちの一方によって他方をたまたま連関させる偶有性こそ、＜場所→空間＞のモメントとなりうる、と考える。プルーストの一節にもどれば、蝿のブンブンという音と夏の結びつきにおいて、夏にしかその音は聞こえないという必然性を強調するのか、それとも、夏という季節に、たまたま蝿の音を聞いたくらいの関係しかみないのかが、メタファー的視点とメトニミー的視点の分かれ目であり、美学的にも形而上学的普遍性においても前者の見かたが優勢になっていたのであった。一義性のみをみとめる、＜場所＞を支配する秩序的世界とは反対に、さまざまな差異が共存し、それらが並置されている多義的世界は、＜空間＞世界そのものといえる。ある語を、その隣接する別の語によって言いあらわすように、連想の鎖はつながっていく（フォークを指し示す際に、食卓に隣接して置かれるナイフを言及するように[20]）。また、イメージの連鎖は語レベルにとどまらなく命題レベルにもおよぶ[21]。メトニミー的連鎖は、命題Ａから、それをもとに命題Ｂ（命題Ａを支持するものであれ、命題Ａへの異論であれ）が生まれ、さらに命題Ｂをもとにして命題Ｃが立ち上がっていく姿と相似形となす。つまり、語レベルであろうが命題レベルであろうが、解釈の連鎖がみられるのである。このようなテクスト生成の連鎖（間テクスト性）が、テクスト空間であり、＜空間＞世界をあらわしている、といえる。

これまでの考察によりセルトーの＜場所／空間＞図式にお

ける、＜空間＞概念のなかのメトニミーの可能性について、つぎのことがいえるだろう。それは二つの視点にかんするものである。ひとつは、命題A→命題B→命題C→・・・のようにつぎつぎと連なる命題が生成するモメントである。それは、ある考え方Aにたいして別の考え方Bが生まれ、その考え方Bにたいしてさらに別の考え方Cが生まれていく流れである。いわば、テクスト生成のエネルギーの流れである[22]。＜空間＞をテクスト空間とみたて、そのなかではつねにテクストの生成（解釈の連鎖）がおこっている、という意味での、流動的かつ創造的空間である。いわば、＜空間＞のなかのうごきをあらわすものである。もうひとつの視点は、現実世界の状況をみたてる目であり[23]、＜場所→空間＞をうながすモメントを生み出すものである。それは、静的な状況にみえるもの、つまり＜場所＞を批判的にみる視点であり、それを動的な＜空間＞へと読みかえる視点である。支配的記号のシステム、一見したところ「合理的」にみえる科学的ディスクールや支配的言説は、固有の場をもち、安定的な様相をしているようにみえる。差異を解消（隠蔽）し、一者に統合していくメタファーのはたらきによって、そこで結びついているものどうしの必然的な絆が＜場所＞を構成するモメントであるならば、それを解体（脱構築）する作業が浮かびあがってくる。ひとつめの視点が、テクスト生成の流れであるのにたいし、この視点は、硬直したディスクールを流動的なテクストに変容させる方向性をもつ。すなわち、同一化のプロセスのなかで、隠されていた差異を可視化していくいとなみであるという側面ももつ。それは、一義的な価値観を多義的なものに変換していく操作である。メトニミーは、それぞれの視点においてその特性（隣接による関係性）を発揮する。テクスト生成の流れ（解釈の連鎖）において、テクストA（解釈A）とテクストB（解釈B）は近接（隣接）関係にある。それらは並置されていて、メタファーのように両者の類似点を手がかりにしてけっして統合されない。図式的に示すならば、AとBが合一してCにいたる弁証法的プロセスをたどるのではなく、A→B→C→D→・・・と際限なくつづく、終着点も中心点ももたないプロセスである。＜空間＞は、このような流れ（メトニミックな関係）によってその生命を保っている、と考えられる。また、権威的ディスクールの脱構築プロセス、すなわち、＜場所→空間＞図式において、いったんは統合された差異を、ばらして並べ置き、そこで並置されたもの、A、B、C、D・・・において、はたらく力としてメトニミーを考える。かつて、メタファー的結びつきによって、AとBが統合されていた組み合わせ（必然的かつ本質的な組み合わせとされていたもの）を解体し、AはBとの同一化でなく、むしろ、Aは、たまたま見出されたC（BではなくC）と隣接関係にあるものとしてとらえなおし、「弱い連関」（ゆるやかな連関）を再構成する方向性において、メトニミーの本領が発揮される、と考える。このように、メトニミーは、セルトーの＜場所／空間＞図式において、＜空間＞の再生産のためのエネルギー、および＜場所→空間＞のように、位相の変換のためのエネルギーをたくわえる思考様式としてとらえなおすことができる。この意味において、メトニミーを念頭においた、ひろく、レトリック批評の可能性の実際の様態を、個別の事例をあげて、探究する作業が必要になってくるだろうと考える。今後の研究課題としたい。

## 注

[1] 樋口（2005、p. 8）は、イソップ動物寓話のなかの具体化されたエピソードが、抽象的な一般的な道徳律を導くことに着目し、寓話エピソードを部分とみなし、教訓を全体とする点で、動物寓話はメトニミー的であるとみている。その着想をもとに、ラ・フォンテーヌの『寓話詩』の挿絵画のなかにメトニミー性を見出す論考をおこなっている。
[2] セルトー、pp. 27-28。
[3] 同上、p. 242。
[4] 同上、p. 242。
[5] 同上、pp. 242-243。
[6] 同上、pp. 25-26。
[7] フーコー（1995）を参照。
[8] セルトー、pp. 120-124。
[9] 同上、pp. 27-28。
[10] 同上、p. 29。
[11] 同上、p. 30。
[12] セルトー自身は、メトニミーの対立概念としてのメタファーではなく、比喩全般の総称として、メタファーという語をしている可能性があることにも留意する必要がある。
[13] 同上、pp. 239-265。
[14] 同上、pp. 239-240。
[15] 同上、p. 240。
[16] ド・マン、pp. 56-57。
[17] 同上、pp. 57-58。
[18] ド・マン、pp. 58-59。
[19] 「作者の死」（バルト、1979、pp. 79-89）を参照。
[20] ヤーコブソン、1973、p. 34。
[21] この着想は、スーザン・A・ハンデルマン（1987）の論考に負う。
[22] 言語「現象」としての「フェノ-テクスト」とは対照的な、「ジェノ-テクスト」（フェノ-テクストの生成という言語的操作）にかんする、クリステヴァ（1983）による論考が示唆的である。
[23] 現実世界の状況戦略としての「ロゴロジー」概念と連関させて、発展的に議論することができる（ケネス・バーク（1974）参照）。

## 参考文献

クリステヴァ、J.（1983）『記号の解釈学　―セミオチケ１』原田邦夫訳、せりか書房。
セルトー、M.（1987）『日常的実践のポイエティーク』山田登世子訳、国文社。
バーク、K.（1974）『文学形式の哲学　―象徴的行動の研究―』森常治訳、国文社。
バルト、R.（1979）「作者の死」『物語の構造分析』花輪光訳、79-89 頁、みすず書房。
ハンデルマン、S.A.（1987）『誰がモーセを殺したか　現代文学理論におけるラビ的解釈の出現』山形和美訳、法政大学出版局。
樋口桂子（2005）『メトニミーの近代』三元社。
フーコー、M.（1995）『知の考古学』中村雄二郎訳、改訳新版、河出書房新社。
マン、P.（1981）「記号論とレトリック　下」『現代思想』柄谷行人訳、1981 年 9 月号（vol.9-9）、54-61 頁。
ヤーコブソン、R.（1973）「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」『一般言語学』川本茂雄監修、田村すゞ子他訳、21-44 頁、みすず書房。

（提出日　平成 26 年 1 月 10 日）